

メナード美術館 開館25周年記念特集 〈2〉

象徴 マリーニ像と 舟越 桂

20世紀世界の彫刻界をリードしたイタリアの巨匠マリノ・マリニの木彫《馬と騎手》は、彼の代表作であり、メナード美術館の象徴的な存在として、どんな展覧会の時でも第1室に展示され入場者の皆様をお迎えしている。高さ180cmもある見上げるようなこの大作を展示するために、美術館の設計段階より展示室1は天井を高く、アーチ状の装飾を施したと聞いている。

開館以来幾多の作家や愛好家から、この作に対する賞讃の声が聞かれるが、とり分け、今は亡き日本画家・高山辰雄先生が開館10周年記念展の打合せに「来館の節のこと、先生曰く、「あれを観なくては…」と、直接会場へ入って行かれ、マリーニ像の前に「これだ、これだ!」と歓声を挙げられたものである。馬と騎手の連作は、マリーニがライフワークとして取り組んだもの。小さなブロンズか

ら巨大な屋外彫刻まで様々あるが、木彫のこれだけ大きなものは特に貴重である。別名《街の守護神》と言い、色んな伝説に包まれた作品だが、メナード美術館の守護神でもあって欲しいと願う所である。

現代に生きる彫刻家・舟越桂。楠を材にして、眼に大理石を施した彩色木彫で、彼独特の人物像を制作し続けている。近年は表現の幅を大胆に広げ、獣性やエロチシズムをあらわにしたシュールな人物像を発表している。木彫一筋ながら、現在の日本彫刻界を代表する作家である。

実は2003年に当館所蔵として初公開された彼の代表作《長い休止符》は大作のため特別展示するミニ・ギャラリーを設けて、マリーニに続く第2の常設作品となった。それ以来、是非メナード美術館でも彼の個展を実現したいという思いが強まり、25周年記念「舟越桂2012ー永遠をみるひと」展の開催となったのである。木彫作品22点を主体に、ドローイングや版画、童話『ヒノッキオ』を描いた水彩原画、それにこの展覧会の為に制作された142点目の最新作《月の降る森》まで、舟越桂の全貌を知る展覧会となった。特に《月の降る森》は、彼の新境地が「光と影」

の色彩表現に見られる。月光が照らす肌は白く輝いて実に美しい。最新作だけあって近づくこと「楠」の香りが漂っている。この機会を逃すことなく、皆様のご来館をお待ちする所である。

(メナード美術館 顧問)



舟越 桂展プレス発表会
展示室1にてインタビューを受ける舟越桂氏

メナード美術館 開館25周年記念展
舟越桂2012 永遠をみるひと

11月25日まで開催中